

ユング心理学からみた

子どもの深層

秋山さと子 著  
海鳴社

読み終って私は、自分の子ども時代のことを思い出してみたいと思った。でも悲しいことに、何歳ぐらいの時にこういうことをしたとか、こういうことがあったという、いわゆる外がわのことは覚えていても、その時の自分の心の中のこと、がほとんど思い出せない。私はどうも、およそ鈍感に子どもから思春期、そしてつまらないおとなになってしまったらしい。まえがきに、これまでに書かれた育児の本のほとんどが社会的な基準にそったものであることから、子どもの心を中心にして書かれたとある通り、私は実にいろいろと新鮮なことを教えられ、楽しませて頂いた。赤ちゃんがイナイイナイ

バアが好きなのは、なるほどこういうわけがあったのか……とか。"子どもにもタイプがある"という章で子どもとつき合う幼稚園や小学校の先生方も、胸に手をあてて考えてみれば決してどの子どもも同じようにかわいいというわけではないと思います。なんとなく嫌な感じのする子ども、そういう子どもは、あなたの弱点である反対の性格を持っている子どもなので。……というところでは大いに思いあたったり……。

そして、ユング派の心理学者の中でも殊に子どもの世界を共感し合った、フランク・ウィックス夫人の考えや出会った症例とさらに、著者自身がかわった子どもたちを通じて、子どもというものがいかにすばらしいものが書かれている。一方、無意識の世界とゆききできるばかりに、まわりのおとなの抑圧された無意識のためにいかに傷つきやすいか、

私のようなつかぬおとなは恐しくなってしまう。

"赤ちゃんは、あらゆる可能性を持つ一人の個人として生まれてきます。中略だから小さな子どもにとって、お月さまも、お日さまも、そして宇宙の星々も、ほんとうに身近に感じるのです" こんな赤ちゃんであつたおとなが、おとなとしてまたこの世界に戻ることが人間の終着点であると著者は書いている。そして六十歳をすぎて、楽しいグリーン・ノウ物語を書いたポストン夫人のように物語を書きたいという、その日を私は心から待っている。そして私自身もそういう世界に戻るべく、春に生れてくる孫からいろいろ教わりたいと思う。終りに、この本の表紙と挿絵の作者名の小さな活字にお目をとめられた方は、いつかどこかで見せて頂いたような絵だと、お気づきになると思う。(赤間峰子)